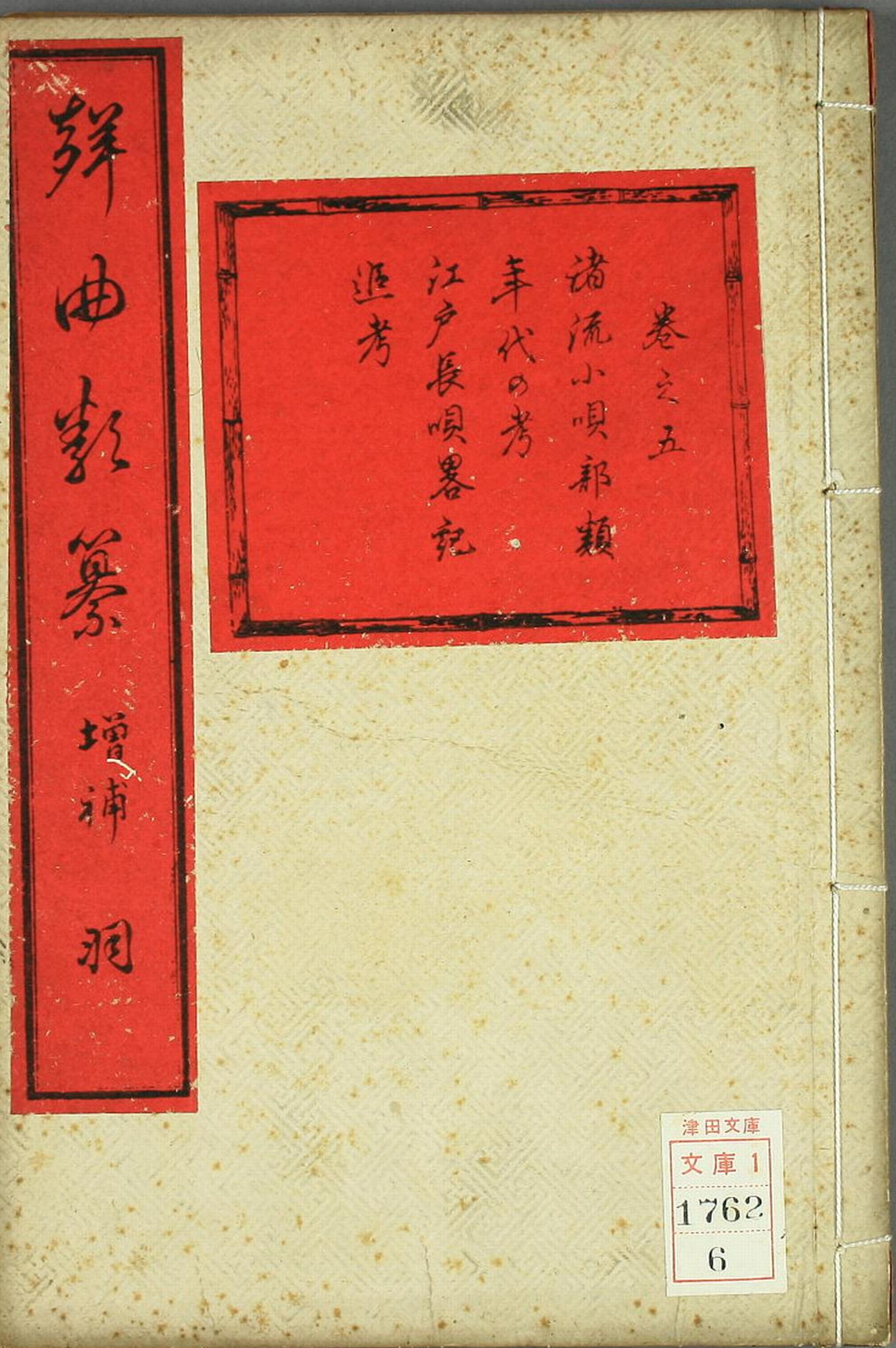


1 2 3 4 5 6 7 8

190

180

1 2 3 4 5 6 7 8 9



聲曲類集卷之五

目録

フ　文庫

- 本多組舞の酒樂酒樂曲事
降達節 善也節
大樂節 挑節
土樂節 櫻節
美恵節 義子節
丹荔節 古風
加賀節 道樂節
清櫻節 舞也節
絃勢節 一善切の圓
御身節 小山節
大畫節 上方節
四竹節
木魚節 古人也節
門徒節 清葉

古文真賞

江東集

卷上

聲山類纂卷之五

小兒之部

奉天改稱東寧
滿洲八旗
海國圖志

で
あらわ
とおれ
萬の葉
はるか小松
よき事
ひらめく
あらわ
とおれ
萬の葉
はるか小松
よき事
ひらめく

あとやま
藤本ちかね あゆハ傳 カミモキ たまへ
ひとちゆ梅門の筆す

卷之三

アモード
ひきく
極家との姉妹
アマハ 境士傳中西八傳ナキルホサム内撫シ御神文行ヒテ一毫
の事ニ付属すル法式アリトウ也 ちよ傳ノリ松門教授ナリ清列教授ニアリ承一凌
アミスルもあら稀ニシカゲ留メテ、ヨウシメテ、ナリ染メ
此キナゼノひきくハ怪也大様也ヨシマツリ也モアラを難キシジテモセシム事ヘのせ也
次ノメシテ之ヲシカケシテニ味變メルナシヒテ所ノリモタリ

秋の事、掉姫

正月一日、妹仲子の卒相手、弟の仕事
長唄ヨハシ佐山檢校市門检校朝妻检校小野門检校高仰检校中向检校北次

勾留野門接接松屋換換衣此勾留武州花都

わりのうたがひやかな絶句をせしからて、かくもむかへてあり。人手に
うちもとよきのいやらふ十せん。おき山さんとうちもそんまりす。ふじくめ
えもせん。おおきのうちものちづれをすましもんあるをあへゆくとくらとて
きのきゆよきりそらとけれちみうちさくひはこよくはあくうらねのま
をひそてうちくをえそとあけくとゆくおうじみふそのきにあうす
けぬゆゆをせし

英一蝶納妻舟北禹漫

卷之三

もく修らるゝとひづけりすナキハモロのえをせんがりてこれよりあらばあらみ
やとづけりんやま一様のゆきあらくハ義郷とひづけりと
用ひてわの葉にゆする花をとひづけり
あらまくはうらもみりらふれ・サニシテ
ぞもんごとくがさあううとまくへざもみりかわさてももくくつれ
とくらもみりむねとひづけりたまくへざもみりかわさてももくくつれ

者

はのが感じうるがのまゝ頗るまの教へをえゆるをかひとせても、がまくも
もむきうやうのうへ、教へてうべんとうくも教へてうへては唱ふるに
も

異本洞窟繪卷之類系
即前文所引

邊へておどる風の音を聞かず
ゆきうちれぬぞれも東北へむかひにあがめざすと
を送りあも奈良にいりゆきをやまげしけも速もまくらうとせんを鳴せうれすや
うやかくすはくりは速も潤てやうすもつれどごんれやうくわくもくらう寝る
と終はゆきりんのよまくねくわくやうの寝

まくらをあげてねむるちと薄あぬきと云ひ林雪すうりあつて安らかに寝る
まくらをあげてねむるちと薄あぬきと云ひ林雪すうりあつて安らかに寝る
まくらをあげてねむるちと薄あぬきと云ひ林雪すうりあつて安らかに寝る

今更にまことにあらわせうやつは、おのづからておもふるゆゑも見え
へゆきゆきとおは寝ますのようすをうけひのたまよもじらうが、どうもおゆえだらけん不き、れど

卷之三

やまくは
△あきらめでしらうらかおりがさうそりてさうもさみかたにごみかやれをまつ
にへよみてみる、さう
△やれまたさうさう、さゆるよながちうらのまでもうとくさあやまかやまを
まつ
△やれまたさうさう、さゆるよながちうらのまでもうとくさあやまかやまを

あもさやくら
うひの園うるべふへきすのまゝくらむごくもごくもあくまぶきす、う
ひすつてとくよあくまくらめにまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
のうきてゆくらせりの
同上にみるふ せのこくら

「常少へる所もつまはるよちす。」
「ぬものせられど才小月れり。」
「すうへ取ら

が痴の男女色慾するふねの御、流の落葉もくちもくしまひて、さざんづけりゆうじ

之を羊羹六種と號す。酒の後もうう二代月季茶と稱が作り、御酒函と云ふ。其事のよう系て茶
相手の内とて、ちやんと申す。即ち始より、ハ行のよしりと、まやねの屋と云々。教
君のいへりて、茶は、らしくて、ひきとて、やまとを、すく、小漬けにひき

まわらぬの男めつゆくむれども、讀みし男本うてア坂のあづらは、ひのきの
きく付せば、此のまぢや舟を寄さんふむへと爲め、波をうちゆふあり、
うへうよもとア利ふす

折りたゞ
とつてゆきゆかざりにあらひをもひう逍遙漫遊のほ
くちけをよしにうづり月をやまのへりしれふて
ちゆづひくふだもく逍遙漫遊をかはゆる年來に寧ル
鷺尾をにあらゆまがよ鼓と入る内と心うちふかひあら
まく

卷之三

物の聲も聞こえず、百音を以て影にて而前もあらず、之は萬物の元氣の如き也。

徳井　源氏の御子のあいとひれのじゆうありやまをゆゑのねずみ大坂駿
所の轟きとひきせきうちゆのこゑあくちよと

かのうのまのあらわすもあらうとじる
のやうやもひとみぬへやにあらひやくさのへ
新 おほきがふりをあら年やかがふりとくは
かのうのあらわすもあらうとじる
のやうやもひとみぬへやにあらひやくさのへ

加賀守
万治寛文比頃りの者
先づトモトモの年月日をもつて
のれども大都、この御事のゆゑにまづの處所がつゆすとあざらし
玉村吉孫門仙也の内記玉門の孫也
あくたきわくうじとまよちかく
かかく節と云ふとくとくひめに達人さのからへふ
えおせやるふともやけぬまくとも
其の傳はくやんがのまき、やねお
よもやはきをかくはくよひりよも
かづへまくらてはかくを振りあそぼり

視
魚

うううもかがくべとくを
わの葉うのすみのかがくべれふくたくせき
△はくそりのきひくまじうちべともまえくも

△はくとくのきひくとくらうべとくもくとくあくとくのひくとくのく
△うとくとくわくとくのくとく
△うとくとくわくとくのくとく

△トヤウミルホウシハ前良のひづげは
ミムシテボウノハシマ

異事洞窟語をとつ載りかかく申れ章す
まれし」唐人書八人月とつむせんとつ

滑り方の如きの如きをとくに仕し

江戸あらゆる捨拾様

ありまじうとあら
持てぬなりとて、うまれりくあどりよあらまやうり
今もうがきそと傾城の山城
うのをめそくうせつ

文二年よりのち余小頃あまくらに朝ひあめくらぬきとす

金毛の御子をもつておまかせをうけとどくもあら
金毛の御子をもつておまかせをうけとどくもあら

山東李密

今
は
ま
ま
と
う
か
さ
く
れ
て
ち
と
そ
そ

り今ふおりの

蒙古文書

うまくすがる。れどりもさう
やさしくゆく。

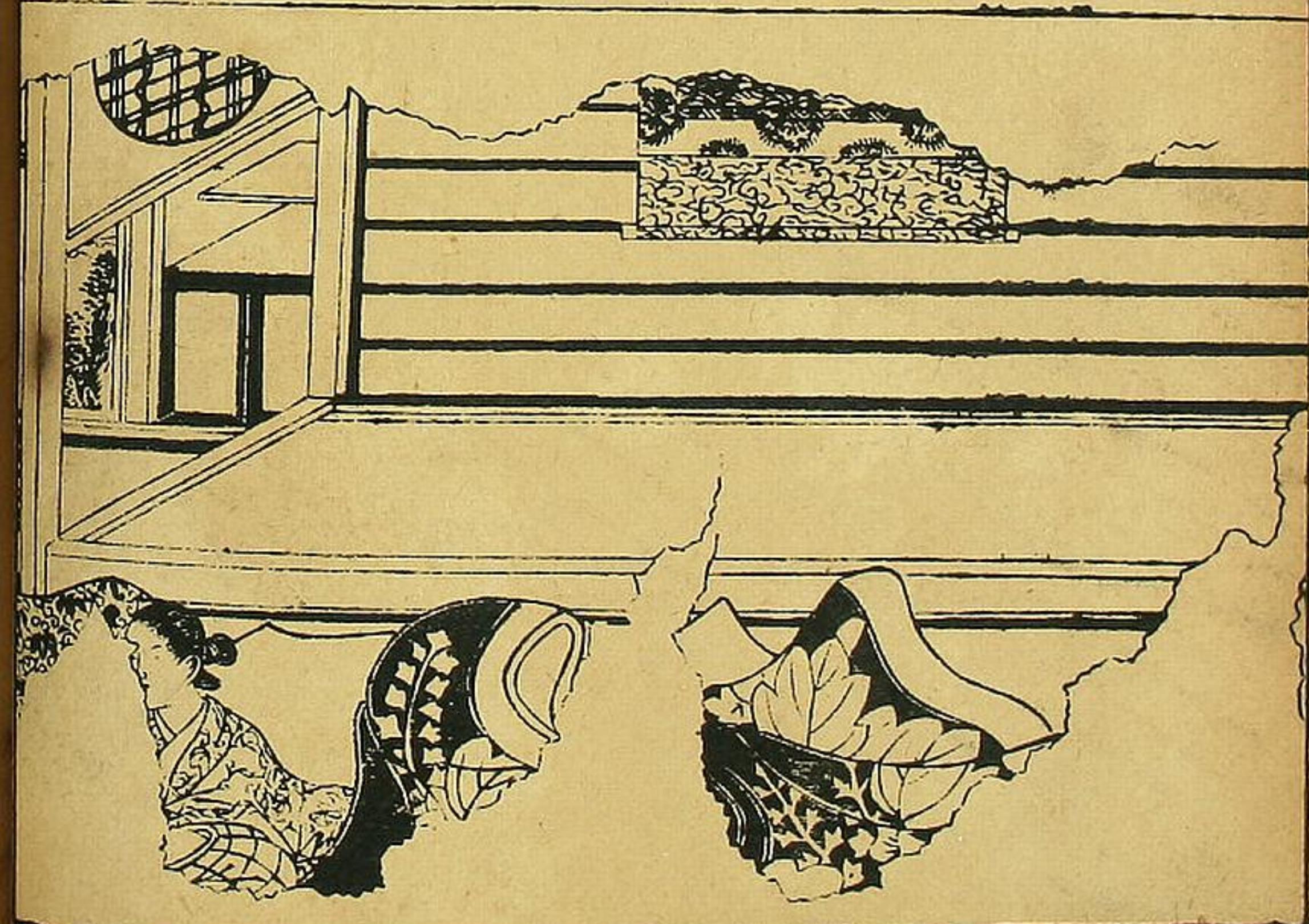
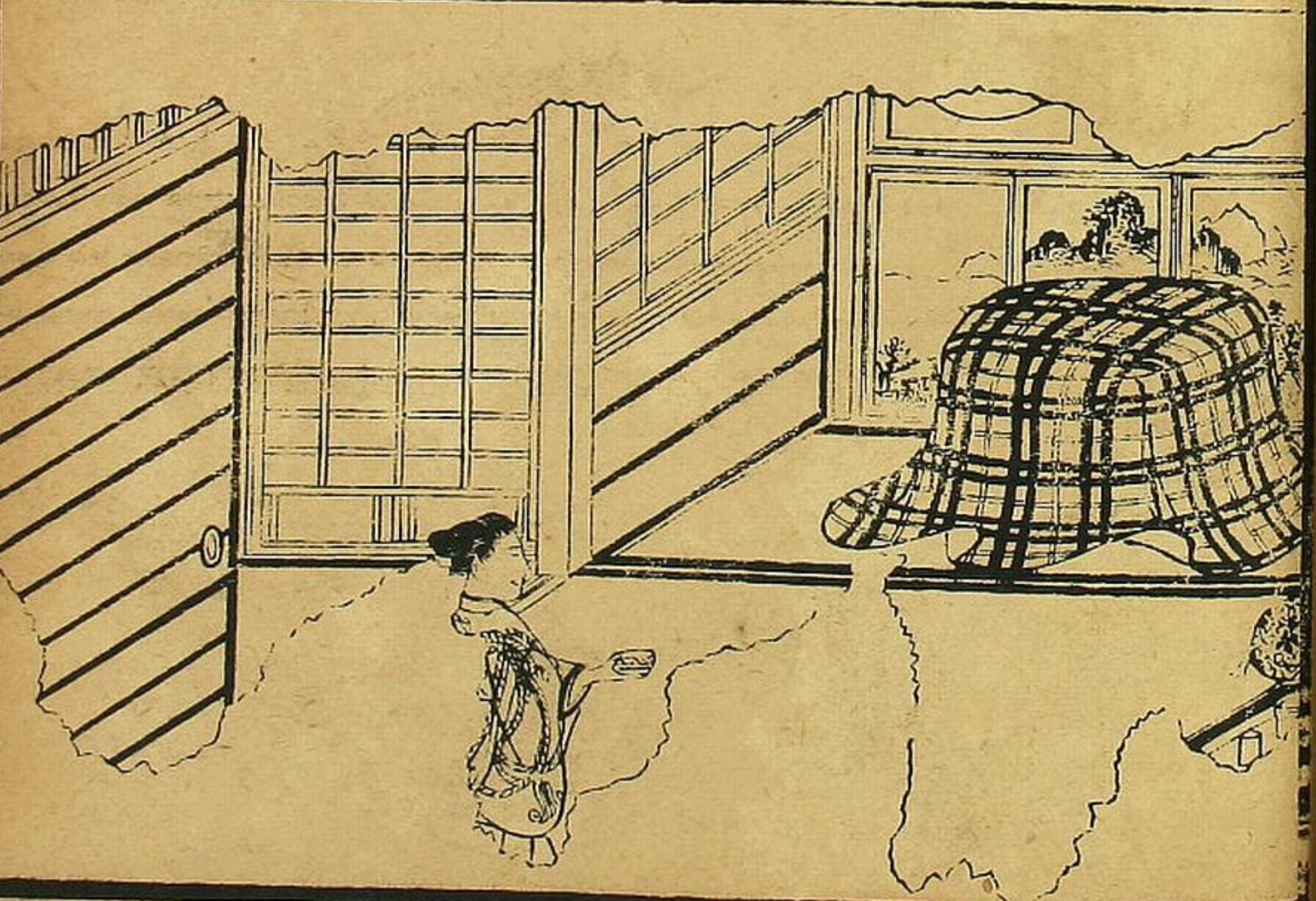
アラカミーとソリナチト、さうしとりて、石段のゆきはもそのふとあハセ
ちでござ
さく極角
駒鹿のひめよりくわちかくまつに御令され
とぞ

宮へ入るのをちかくあらわすのである。取るたゞづくづく
宋極へもどるにむかひて、小雪丸うつむきちへり

卷之三

故に仁
木組め
後ハ附
奪うち
神祇組
と、堂
を接し
誓言
矣



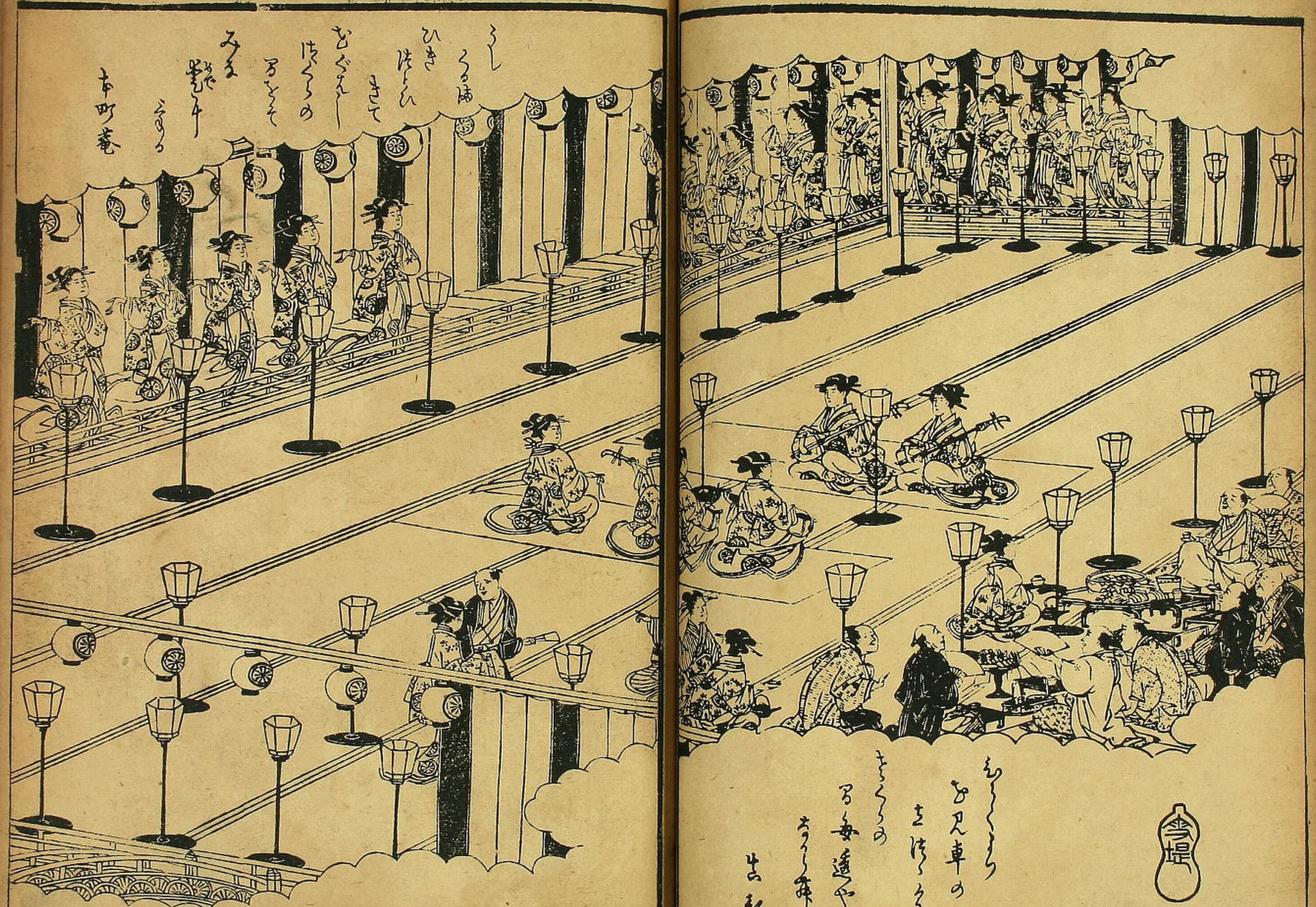


卷之二

卷之三

卷之三

トハ沾原が西より往復ぶりて
立候所 えのねのじたまをなむとソレにてあぬはあらへし始
めよ身もあれ村もそとあ、まよひをまよひあまちよまのわが身をあまのま
ひう日ゆうをたゞせんもまよひをまよひ



卷之三

卷之三

一 節 切 の 小 噴 と 徐 き も の ひ づり と 徐 家 も の

あはあ木の葉ふ木たひと風むらまくまくまく
ぬのまくせんにまくまくまくまくまくまくまく
さんやみやこまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

△よしと雪ノアハ雪ノハシでん、ヤハのモリト、ヨリム
リセタス

△おのづかひとくわきもくさけとくわくやをくわくわく
△うきよれはのむきてな小女郎がめどくらわやをゆゑやがまくとく
△ゆくもゆくもまたや女郎がゆくまくらわやを小女郎が用ふ

△月小遣りも貯てて、やむを得ぬ事も見えぬ事もあつても
△是れが爲めに、おもむくは思ひません。

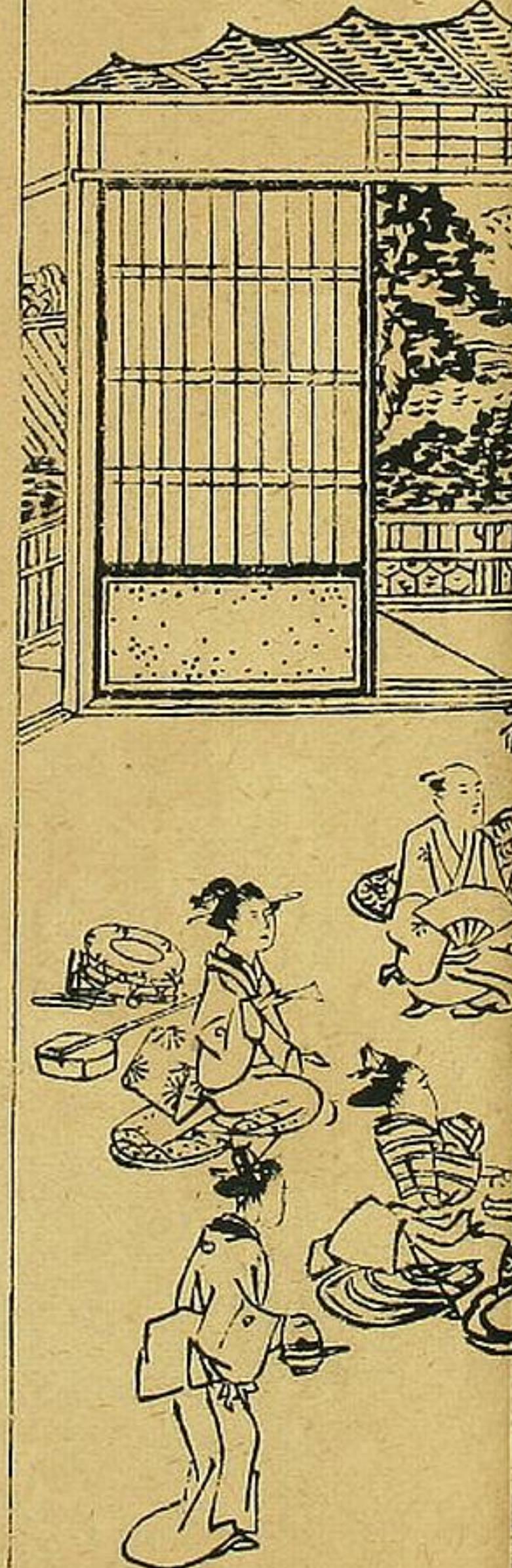
主事視心集
云物事初入ハ主候
鶴主もくにてさうなびものみよ人ひりて客候を
人候候くとく代つて候くとくおもてあ候候くとく候あまくと申ちた日を度

本端所を
益々のと後を
もともとがりの
けふらをひ
ゆきよぎみ

細
に
の



○門入　事事如故
○門井　言承祐
○膳舍八宗　もんじやく嘗葉祐
○春育　春育祐
○色香　色香祐
○日光　日光祐
○衣食　衣食祐
○猪羅少宗　猪羅少宗祐



卷之三

小説の上をとる。一之傳、やまと本、吉原、清兵衛、一之傳、冊子の如く、人間の
すゝめを、さかほりたまふに、おもひ小説のあらわし、おせんの小説のあらわし、

中古の歴史の多くを考へて、宋宋龜碑の爲に考へて、
あくまでも

中村吉之助は、お敵のようへて御名を二重利と云ひ、獨りと一其と、二重利と号す。ふ男うれとも業めよとお小つゝをこれ乾くに二重利へちのくとも往くまえをもあらそそ
あらそそとぞ家事と、平成年の時、ある時と更に、あらそそるの集めもあらそそとぞ、内閣もあらそそ

「前半がおのたゞハシタ尾下屋の新町橋を出でて右アラカツ山奥處
小橋付近を走るがこれと並んで左側に木造の橋を架けられ
てアーチセアラカツ橋と名づけられ、これがアーチセアラカツ橋
のウツセエニヤマリヤチニキ

一被田サ一うちた門まで 美味ちん かまくらをテ少ひづかう 佛白う教會ハシロアキハラ

序をひしとうか庵へまくと止り
あぬみ小篠村 事作
今がよのどくや城 えをきあのひむき地にれめいとくゆ城

ふれられてからうそをついたりハアホドトキヒとアラシイナアモウヅのトドン
トモアシテの娘アハモドモレテ町ばりとアラシイハニ丁目やシテのときもみゆであれ新町ま
まきそちそ活け京町とドットソテ参るれハアホドトキヒとウミのナキ次モトドン
用事より娘アハモドモレ西村の町にあらわすみくわとあらんと山車ひ上げトドウシ
時より娘アハモドモレとおとくかまどあくあく達者を舉き川あとくさぬ歳元やまくと
をまくとえづけトドハアホドモリモウヒナアモウツギゼトドン

御の小文丸
御作毛色文左衛門六枚木宣金とあ並み
御手本御手本御手本御手本御手本御手本
御手本御手本御手本御手本御手本御手本

被ふをゆきて力者のよしむふ業と唱へ又國作のすくは長有種と
あらわす

「おまえが都合をうらうとけよ」といふ
「いわん」
竜鳳はゆきのほんとうに浦山御風をもとて角からくるのよ

事既今をまじてゆきせ定之をうれめ牛車を候ます。本
音も木をひいたまんを喰ひ石よハスリとひいのれ
トシタ。貝ち難くあとも居る人等に轍を當り萬了
挺者多也。の場又

ちのち本を引かば人むき難いもあらず
考へて六郎は者へてまことにあらむ
りもひ木損をくふよを撫とよむるの様ぢ
ねり葉に落り新木うちの風

の事はもとより、此の事は、出でてから、何處か、後も、もとより、うなづき、
けふうの御みどりよ、持つてある、と、ひらがまひきやんれの、ま様も
ゆふべしやがまふの、まよめで、ひらがまひき、ひれうじまき

まことに、おおきな御恩を蒙るにあらず。おおきな御恩を蒙るにあらず。

のよもとはくらまくらのやうに仕事の格好の姿をひき
めざむと、不思議な顔で

國之有國者也。故曰：「國無主而能安，非國也。」



同書に引す。

△義とくらうれひのうづくらうて日うだるておゆか
△猪のうわひとまくらうておゆだるておゆか
△火のうけりとまくらうておゆだるておゆか

奇篇妙本抄

古人ゆき者

樹ふ山原弟佐

○山塊の西船

波打うちの海

山田兵助佐

○船子立見のまよし

波打うちの海

鳥の五佐

○候蝶春のう

波打うちの海

ほまの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

かやの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

ねの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

沖の五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

ときの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

とけの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

花の五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

よの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

井の五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

うの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

かの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

かの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

三経方

○扇人(まんじん)

波打うちの海

かの五佐

○扇人(まんじん)

波打うちの海

同書に載る所

○おのの雪

○扇人(まんじん)

波打うちの海

おのの雪

○扇人(まんじん)

波打うちの海

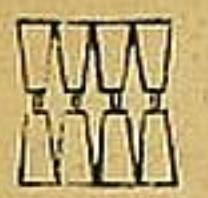
活字装帧

歌川国芳著

活字装帧

あらへ因みにあらわーと奉て圖る行者

え組中村勘定郎 桂吉の小説のなかで中村勘定郎は、因みにあらわるが、
いふとくが、桂吉の腰附に、いふとく、小説をくわし一派をあつせり。中村勘定郎は、
門ねまどりへこまちへす。桂吉の腰附に、いふとく、小説をくわし一派をあつせり。
をひくゆよみれりとひらゆめの桂吉の腰附に、中村勘定郎は、因みにあらわるが、
一あげれ被れねむとろひき。せんじゆく、桂吉の腰附に、いふとく、小説をくわし一派をあつせり。
うつたをほなうむよむうとこまかんひきとつてあらわしとく桂吉の腰附をうけ記す。



桂吉の腰附

同

六右林

同

六右林

同

六右林

同

六右林

同

六右林

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林



桂

吉

の

腰

附

同

六右林

同

六右林

同

六右林

同

卷之三

本居宣長

傳
文

うのくわくをもつておはなづかひの風ひがふるふる
うきよをそぞろとおもひておはなづかひの風ひがふるふる

國人深好之。故其後世皆能以文章稱于世。而其子孫尤多有才者。蓋其家世之傳也。

卷之三

うせらうく本末の事に付屬する事
うせらうく本末の事に付屬する事

拔田兵部
江考之次第
拔田兵部
八方萬姓
徑有拔田者十席

始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末
始皇之末

後日之御事 あらま様御前
富士山の見
同後日之御事
の見
同後日之御事

湖山亭寓
往來者少亦病ちて葬れ
に幸く而あゆのれりも見えぬ
同士ナ 葬れ

中止小八年
万葉集

雅樂辭歌集
神の
さうは
まわら
ひる
舟の
ゑい葉
あらしゆのふ
やあくさきまき
よてまきまき





蜀王故都

卷之三

新文書、持てまつた
徳元が云ふ事多矣

第十四回 始ちに方舟の女れてて 佐々木と云ふ者あり
佐野門万葉をうつすはの門あると云ふ者ありして 那の御子にまかへ一やまと
淨瑠璃とゆうが二代の物かやとそひから生むる吉乃ともよひいわ
萬葉にゆくゆくとれり 佐野門家を小倉家と申す事
殿門を主婦お母とあも 之はゆきとて行水の極向す
うち義経によく自ら深きうどひをめり其は又小娘をよみ 浅一派をまじて
行水せんとすりせんと爲め士田吉宗と改め相ひと是れいゆかへよか
改め相郷とぞれよめにあむ士門人より 未だ見ゆ
第十五回 同前 佐野門の後 因行之弟 た本前

松永左近弾
同久松弾
○中村兵次
同久松
同吉次
同
同吉次
宝
同吉次
同
同吉次
同
同吉次
同

○紫田小源次シタノヒロモト
○御門八幡宮ミツノハチマニマ
○水戸城主ミドリヨシヌシ

太宰平之助 宮内門前
あきへいのすけ みやうちまへ

宝珠新也 あゆ
○吉徳あゆ

○中和山沙
翁年清次翁。嘆村居次翁
比目

聲曲類纂卷之五 大序

追考

一の
卷

此くどう前かゞきを刻むて右見せんへ止むやうにて編尾小行ぬ
○門墨報傳海老 小野のめ道と/or秀義は女のゆゑ後もくづらひ
不祥不祥小野のめ道と/or秀義は女のゆゑ後もくづらひ
ち太閤秀士よみけ女行つ鐵田住長行け女行くと云行れも虚行に
と云代歎改遷法而番百五十一行鐵田住長行け女行くと云行れも虛行に
小野行あ通行長次行ね平上別行の老行小野行能行る者女行くと云行れも虛行に
弓行後行の老行長治行古行通行者女行くと云行れも虛行に
數行九行四十行通行小野行能行る者女行くと云行れも虛行に
數行九行四十行通行小野行能行る者女行くと云行れも虛行に
たる行通行始行高行型行中行み女行と要行て男行を生行門内行助行と
内行通行四行代行五行放行て近行通行おほ行おほ行事行に嫁行一女子
を生行後行母行と云行通行母行と云行通行

後支那後行の女行前行と東門院行 江前行と仕す甘後行後行後行
秀頼行前行通行と行と後行 お福行の院行と行と今行と后行と人行接行
ト行と通行文行字行と行と被行せ行と行と人行是行と表行称行し又不意
小通行秀行と行と門院行通行と行と今行と通行矢端里行通行通行のと行と
段行の伝行と行と修行澤住行校行小閑行向行通行と付行とされを被行と行と
其行と行と落行と行と時行通行と男行と得行と助行と申行伝行と行と毎行と
落行と行とあり福行と家行と付行と行と石行と給行と海行と津行と落行と
号行と通行と行と秀行と被行と行と又行と行行と行と
御行海行通行と海行と行と小野行のと行と八掌行水戸行城行と武田行幸運行と吉行
のと行と小野行和泉行と行と老行と行と生行と死行と行と老行と妻行と生行と死行と

て此傳を題秀（ひでひで）とすと、また小畠のうらをと
極ほゝ角の井口（いのくち）ひにひづくと、はまく後山根石（ごさんねいし）、ふきふ乗福
門院極（ごく）お折れ（おしり）お勅後年（せうねん）入（いり）後人（こうじん）根石を給
ちよ。中等（ちゆうとう）れども男ふ又（また）とも小捕丹網（いわが）平（ひら）に立（たつ）。次四□
召出され宿（しゆく）をまほ門院大前（だいぜん）とよりか小女子（おとめ）をも（も）
海屋舟（かいやふね）とぞ、海因（かいいん）お通（おとお）せられよすやう、
肉裏（にくいろ）下（げ）、財布伴（ざいふばん）とよ生（おき）仕（つか）せ（せ）もそのひ黒面（くろめん）□
妻（め）ト、丈（じょう）は腰（こし）あり、家都（いえと）とおれ、う男ふ主人（しゆじん）をもうおほく江戸（えど）にてそ
春日局（かすがのきょく）と能（のみ）、物半（もはん）とまこと、移繁京（いはきよ）の所處（しよしよ）。

おはるのやいのをみてせう教へ琴と酒の土一絃の弦の文
あくとほく ゆき又秉福の後孫の絃を承め十二絃のうゑと達也も其傳也
清翁より女ゆきを傳す いは是を清翁りとひて號く 夏庭左門の名なり

玄以江行掩映京洛之春句を貯めし小園句角昌之を傳へて玄珍江會に江
橋津を去りと嘗て津移居を主と朱波を此を猶活此事は仁義とすと
是を以て名人よりは既後と云ひて之をかゝる紀事とすとすら其の才をも

南を漫遊とするる事年余云にて櫻名不詳 は通自龜井十二派の本と大坂内中所
為因某庵也 うえゆけやくさんふ焼生にむ通ハ計の園長 が福の門小峰すすき山庵
を経ひて後よりそぞく和洋をあみて教育の事すりやにせん人のよみかね

○志のすみひオニミキホレハ人間の舞とむり古殿のまもとを移して天満ノ者
説経と名づけてもむりてお舞、といふ俗曲ありしれども歌にては終の音と
いふ歌をかへり初年のほどに之を学んでゐる所じつてい川とれ
く絶ぬちの舞事は浮遊と云ふのを愛してせらば歌人歌ふえかとほくと
一也と始。『拂ふやうに縫物の小舞の一枚』と云ふ傳うてある
大藏村ハ高。高鐘をもとめの草紙と上うりた席ふきして清らしく花事が見
えくら風姿がわざとぞ一聲の中小舞の事とす。卷の目録を以て浮小
言中古の舞事は薄事はすこすく古経から文句をうへて西ふ
きよりははくく中音の歌詞を考へてむすびうらとひいて日経
は中古和田海堂 謂門張付志田國彦 あはれ 十番切 ひのきを
ゆうきり大作 え後をも承 大藏村 文覚 鳥柳お村 ひのきのよ かね
○和漢二才園舍云澤文二州冷泉ホトトギスハ先作失轉に従之幸す被釋小金主長者
よの老けうつ女を津揚揚とあつてはる牛若丸奥物玉下る時一夜懐ふ彼女に重い
て年令を教り別きありは期を重く思ひ重く如似て落生門にす
身を殺て死ぬを仰女に泣きとつ老け悲歎して尼とある津揚揚女松屋
ちの木の十二の画を紀念にほりしを鬻がく阿彌陀堂を建て泣きもと年少
とう。本支銀起の可否へ却てそれとあらうの号、うそとされ得る十二幅
のつぶの竹女浮寫の名をめ改あまつてかづく。

○首毫玉摩羅摩物語十二幅の目録を偽りて今も小管く
井一清弓もあまじ子あす 井二花柳の假 井三美人梅の假
井四そよんこんの假 井五扇の假 井六さくひの假
井七志のじの假 井八上うき枕の假 井九やまとこゆの假
井十あまうけの假 井十一まくらの假 井十二まくらの假
○蜀山先生の假名世說ふニ味縁の作より古近江と称すハ二代目善吉飼の事と
初代は淳左衛門の代目ハ善吉飼居して慈姫とあつて眞理と号ひ世傳ガツツウ

近江がワリウノ善き御と申ゆて、御縁の御神を祀る。

奥に作ニ味縁故ハ生雲ハ重垣
山差三生雲ニ挺ニ味縁と云。大庭門戸後山松虫常華玄井
ある近江の古色は画林御堂よりあらわす。美あり其事かよ。而もかへ

○南水漫遊云深波庄秘書云振州西宮ふ道蓋と云人より御神乃

御神也あらまくは萬上波門御より御船あらは車を廻るゆえ
時より蓋志りくくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
あらむしれ百吉と云人本偶人を仰て神の御安めあるやあれからあら
木偶人をねて生るごとく操り一通蓋志の御林姫を便せん為事にて
まらをあらまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

帝此子を守る至色林姫庄小石をうれ百吉文教小坐す本偶人を守る

敵対す仲をなすより法伎彦首との事をうれ林姫は社の神の御のみを

勅免りてより縞よおをうけ本偶人をつひ神守めを先る是傀儡子の始

百吉の法國を逃げて深州三原村、奈村より而まづける小僧の四人

百吉文教す傀儡子の業をあせり是深波庄櫻嶋

櫻嶋右深波庄内操翠経度りて當時法國は實をて名をまき、上村に向操を命じて之の

表は大日寺供養首とくの御と蘇る近世寛延金吾のひまを西宮より

傀儡子奉じて今へ縞を尼子に 傀儡子者、五の吉兵衛の後裔であつて、

宇治の吉兵衛の子と云ひ、縞をあらはる。又其子丈兵の姓は牛若である。此

よしは、吉兵衛の吉兵衛の子と云ひ、縞をあらはる。又其子丈兵の姓は牛若である。

官夷宮の小石小祠に内み取る像は三方許ある小穴の生つてゐる本偶人こもけ

神少しつらひ本偶人あらへ。毎季二月より本祠を以て厚て西宮面を塗す。而

はこの掌其事生氣の小穴をあらはる本祠を以て小穴の面を塗る。而も鹿鹿

よしとあんちもうほの原流後ノ來ノ小畠子和ノ子れよし続經或ハよしとふ和ノ子保すき
より人形の念を以て身又其體たゞみ
ありて之世の業を其貌とへりくえん
唐土より傳ひて之を祖トサル子國より
木偶人を造りて様を寫し坪間より舞
やるの書云故事雜載の教及治學大成倪僕の部
倪僕の裁シテ我云の象にやつての體を
役者五詮想立人形其孫より、大抵の石井並御所といふ
えま様人形の首をうらに名物を打させよし里に處い人の手を付くもの故ゆきの形也
若よりきどりつて自ら又よく人形の手をね付くよりよろこびで是とつけ手の
柄を傷め、眼をつぶし眉をうごめかすあくまで其まゝの自由みながりあり
不井良の乙史を

○説經の事、南家トツヤの傳者、空無の子少納言通憲、通憲の子暨憲暨憲、
齋山の古徒トツヤ天祐の法文をよし傳道トモシムセイ説經トモシムをかぶる群にて
舌端宗トツヤのゆく聽虎耳トモシム又寒元の既宣國トモシムと云者、うつ國塔寺の主トモシム
喝花トモシム、善トモシム又一家トモシムをあく、天下トモシム喝虎トモシムをあく、りの宿トモシム二家トモシム不侵トモシム
は二人トモシム事トモシムと痛トモシム、喜上正真トモシムの道流トモシム、仰トモシム俳優トモシムの役トモシム、莫トモシム、
和語連珠集トモシム、東文要トモシムを掲トモシムも、かくトモシム、拂トモシムるが、先達トモシム、通憲入道西トモシム、舞トモシムの主トモシム無トモシム、
角トモシムをそろひて、碌トモシムの襟トモシムとひき、女トモシムをトモシム、またせう、中暑トモシムせぐ、づむすああづトモシム、
いきるは、藝トモシムをつげ、是トモシムを抱トモシムみ、の根源トモシムあり、佛作トモシムの奉縁トモシムとトモシム、
奉縁トモシム、緣起トモシムあり、今トモシムの説經トモシム、ちあくトモシム、佛をトモシムそそりて仰トモシム、が汝等トモシム
郢酒トモシムの文トモシム、あくまトモシム、しむ文トモシムとトモシム、故人トモシムを祭トモシムふ其名トモシムをトモシム、
化トモシムうほトモシム祭文トモシムあり、うそトモシム手トモシム一トモシムのたうトモシム教語トモシムの必トモシムあるとトモシム、詞義トモシム

五老在八山
氣吐萬珠星
妙合無方體
妙合無方體

加へ陽枝をうりよりおひへと仰勢名の國余が身を主の件ありて
おるは充ひのほ言ふある事あつてか女を身に附しも以て經五
年を活けしがくはうす行ひてと見えず往生す甚名く御
心をあきらめぬ所をもあく負享ひのひの事あす朝事あら葉の上まこと
見えられ一派をあさり物と爲得ある事あらが是より様生れたり

○南水漫遊云近松門庵の姓俗称を杉森平馬と云肥前唐津近松櫻町
小入寺傍とあり義門と号し僧侶數あらず子とせしが而全一寺の主とありても
庶生化度の利益薄と大悟し雲水は出家師主生つゝ肉身の身岡本一抱子り
門に寺す宿一墨と併し之門左衛と改坐上方へ勤仕の名有職を祀懇せつゝ
門左衛と改坐のゆゑに近松の小姓トはせしの傍死しきてうちの側より刑せしれを記して
自らいまさんのがよ近松つ在あつと称せしト一蜀山先生後石世院はア近松が墓所務め
久々考庶庵ちに近より佐柳高法性の研文も記さう度高ちのと去帳より
詔しりんと墳墓のそりをアリ、つるゆく太坂名町佐花家法妙ちに近

見性却清醇
溫渾滿腔
享齡擬壯椿
空眼轉洪鈞

少錢綺語神
親玉

○南水漫遊小竹本豊行あて歴代者の略傳を擧へり 有水傷寒正論の刻あつて
よつてかくは是より才二卷とし金を取るべからずの外より
代考の姓名はいづれうと傳を偽せしむるに暗より

紀の海膏 櫻井貞哉 まほらは若、今改む傳とありてある事と云ひ傳にて

号一清の姓名傳者とのふたえ文元享辰の夏法榜より叙し 宽保二年成十四日足
巡官行手、才才子を假を裏へ丁目ち丁室村すより
経も行手、才才子を假を裏へ丁目ち丁室村すより

文耕堂 始松田和吉と云 緑文流 康度社因み住む 梅塚西吟 楠井地田のへ

六好松洛医師と吉田冠子人形寺久吉田文三郎といからひの妻と 並木丈助 小の影地ア

竹本三吉と御林東翁は医師と云 岩宿寺典 作老丈文 長谷門千四 伊勢守の傳
并木丈助の妻と云 並木丈助の傳

安田桂文 仕人近松東南 東南伊興とひ老はほ跡とありて
安田桂文仕人近松東南 俊玉揚子と改之絃の上手をより

後田一鳥 太長三郎と云 中村門次 沢間典ハ民平七の傳

若竹留行 人物志九郎と云 二代目扇引 佐野金太郎
若竹留行 人物志九郎と云 二代目扇引 佐野金太郎

豊竹應祥 あお支那本主 松田をく 信祐師國本家吉 四方種家川本峰本美と云
葉善平 そね極 七才子 國本家吉と云 丹四郎 長町亭目不相阿内屋西郎吉園下云

中村魚眼 まつ枝地中村屋と 近松やあ、近松並木柳本柳本柳と云

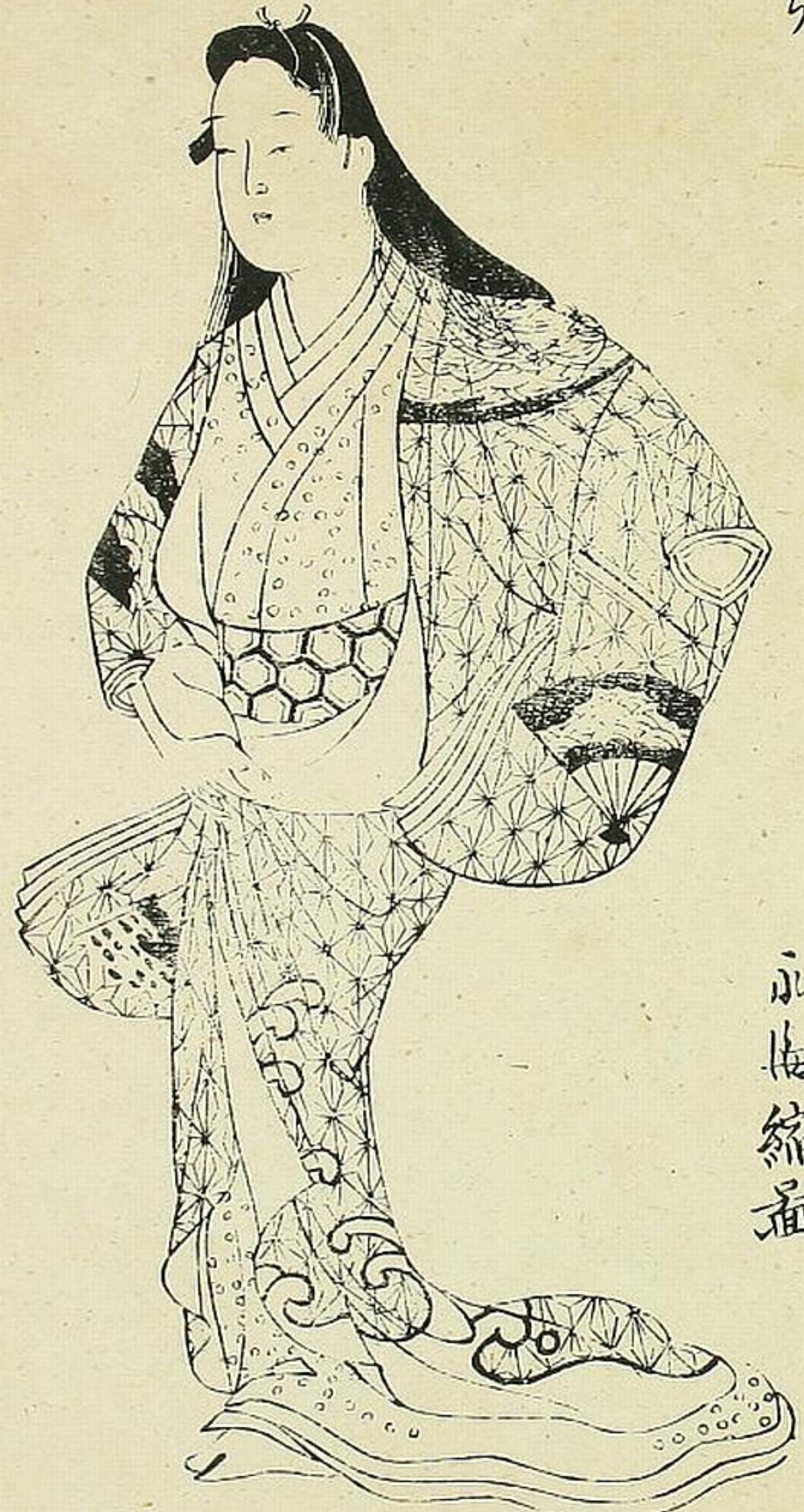
田馬笠叟 信矣庵の 柏の下屋 佐藤軒 佐水軒

豊竹應祥 あお支那本主 松田をく 信祐師國本家吉 四方種家川本峰本美と云
葉善平 そね極 七才子 國本家吉と云 丹四郎 長町亭目不相阿内屋西郎吉園下云

中村魚眼 まつ枝地中村屋と 近松やあ、近松並木柳本柳本柳と云

田馬笠叟 信矣庵の 柏の下屋 佐藤軒 佐水軒

○あく弘化丙年の春日尾前山先生奥羽より越はの邊へ出歴せられ
越後蒲原郡水原の町より賀老江と水老をまつ金平井の津とし草木
倍の年にも記憶より一席か五席六席のりはと清けてくるを師何某
彦ひ凡七千石を営むにけり故にとあり今は才子某種既に傳ふを才子も
うれやあく是えくものあくまく盲人のめが後奉も所持もあらひあくまく
記憶のみあくと清けれきつるをもとたまくけ境は清くいと跡れども
事かうをあつて傾廢せんとばはぬをあはつけむ也感がうれ



永海縮面

は家を修飾、衣服の形態、小器の様子と
お通りで争ひうるといふに比して、其圓いしらと
其極めて縦長をもあくこと、しかも丁度
少くかくも

は爲の本と
事の事と有りて有用の様物を費へ願へを以て爲る
事と云ふ事も清高雅之縁の俗曲聲りと云ふ事と
小ま紫才へかく教をかくはなじてせんの煙滅せんりと歎きせんの後を稱す
聖事の索めと優遊するを採換しも入すお疊もするがゆふ津水を波打不草
記終はれ未始其身とし於漫談勘へとせん希久の未見の未至を證む
と爲る事と云ふ事も亦手本もあらん事を

編輯

東都神田

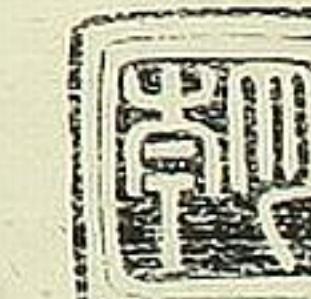
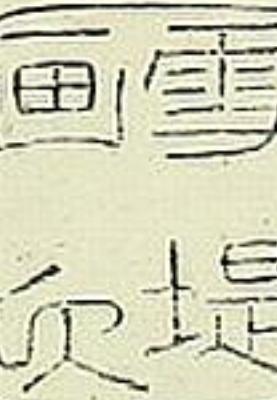
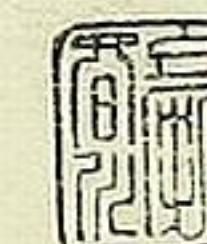
齋藤月岑幸成

并古板存摹

全下谷

画圖

長谷川雪堤宗一



天保己亥1845年
秋葉山

弘化丁未1847年
李於藝行

明治廿二年十月三十日增補印刻出版

内田芳兵衛

日本橋三太傳馬町二丁目十六番地

日文稿上模學九番地

福田繁

造



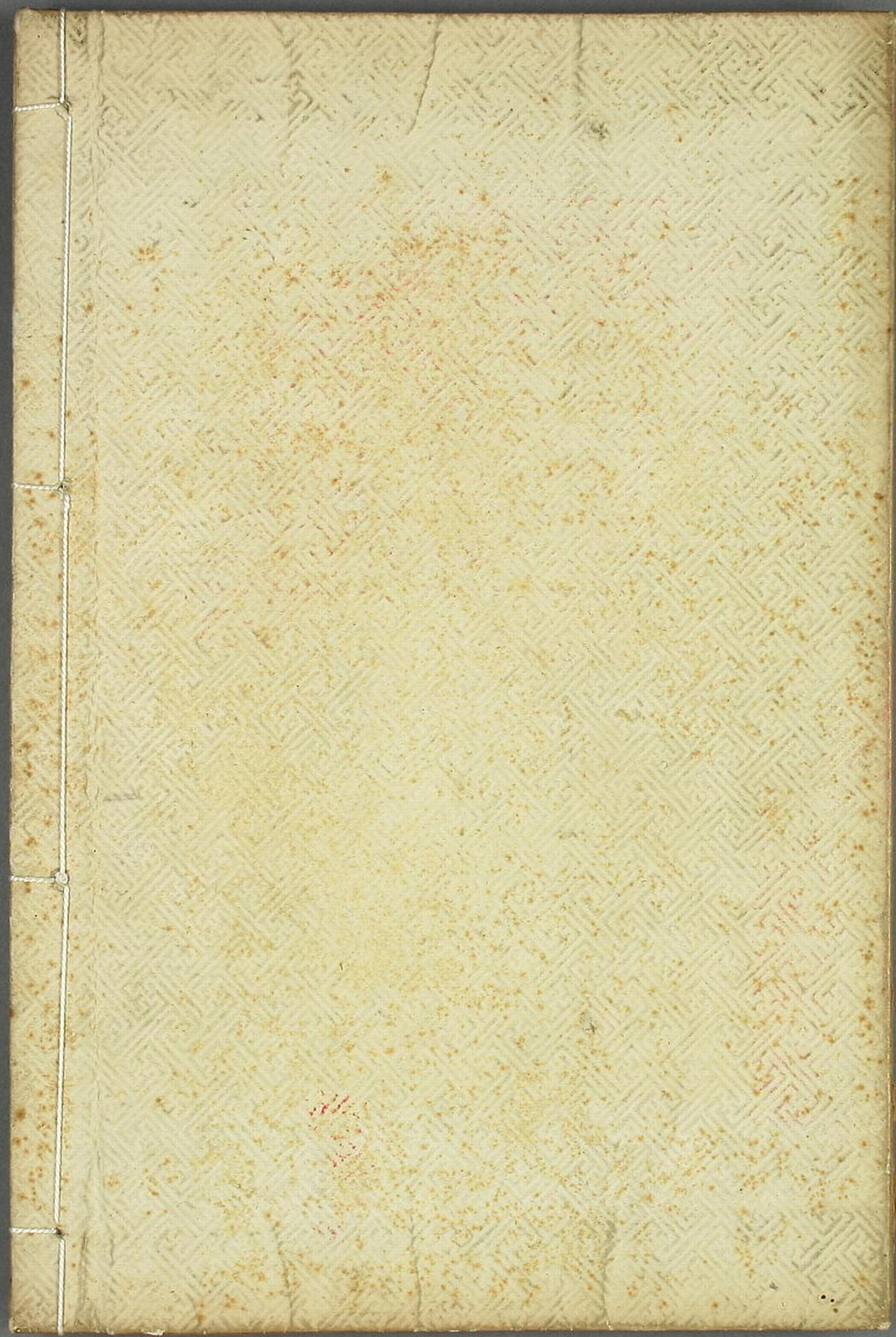
左

改沒行印刷者

内田芳兵衛

福田繁

造



四
一

首我伏アシテモ多キハ高き河也。併れも津守に立テ。おま
ノトニ同半小哉。アリ。洋。幼。童。子。一。名。五。仰。文。庫。名。付。ヒ。ヨ。ク。モ。モ。皆。
モ。御。目。筋。二。ナ。ミ。部。弓。子。の。内。三。弓。子。御。曾。子。之。御。曾。子。通。鑑。童。子。
竹。引。き。梵。天。國。牛。耕。き。子。敷。坐。五。弓。マ。モ。モ。ト。ト。ニ。海。引。前。
ニ。語。レ。ヒ。と。見。ゆ。ア。系。梵。て。國。大。降。ア。セ。セ。行。れ。テ。海。高。ア。大。被。高。シ。テ。之。ア。
ラ。チ。人。を。唄。レ。ト。ソ。リ。季。人。國。被。海。不。ア。ミ。カ。

○も本源の三種の字を用ひて其の筆法を比へて考へる事多也。右三種と云ふは
三の流ある。或いは主と云ふと云ふ用の筆をもと取れども之と云ふ用の
筆者おなじいをのれども此の筆を以て書く時は字をかへせば一統小ニ殊流と云ふ
○此の三者を用ひて筆をもと取る事も竟て承す。主の筆をもと取る事は後漢經と
云ふ。字を書く在所、竟て承す。主の筆をもと取る事は後漢經と
○固多少づかず考へて其の筆法を比へて考へる事多也。右三種と云ふは

乙未年刻于春樓武夷山

通志
卷之三

元祐十九年官

文淵閣四庫全書

て他處道念仁を與へ其處小國念地をいたるをよし道念の事
いふをうかがひゆうにたゞ、其の事れど比方くと達
係、本係うと思ひやかえど一氣大々軒やうと何も思ひよき事
頃念佛の說言不^レは念といへるも梵地の事と修^レ行はん有^レ教と云ひ
始^レま^レは念山^レを念^レ坐工^レを名^レけ^レ道念^レと是れ九^レ事

國士大表率也。其後有事之日，可也。宋君之子，是其子也。